

畫の裡

泉鏡太郎

青空文庫

「旦那様、畫師ぢやげにござりまして、ちよつくら、はあ、お

目に懸りたいと申しますでござります。」

旦那は徐羣夫と云ふ田舎大盡。忘其郡邑矣、とあるか

ら何處のものとも知れぬが、案ずるに金丸商店仕入れの弗

箱を背負つて、傲然と控へる人體。好接異客、は

可いが、お追従連を眼下に並べて、自分は上段、床の前

に無手と直り、金屏風に御威光を輝かして、二十人前の塗

ばかり見事な膳、青芋※の酢和で、どぶろくで、

「さ、さ、誰も遠慮せんで。」

とじろくと睨す輩と見えた。

とあたか、其の客を會した處。入口に突伏して云ふ下男の取

次を、客の頭越しに、鼻を仰向けて、フンと聞き、

「何ぢや、もの貰か。白癡め、此方衆の前もある。己が知己

のやうに聞えるわ、コナ白癡が。」

「ヒヤアもし、乞食ではござりませんでござります。はあ、旅

畫師ぢやげにござりやして。」

「然ぢやで云ふわい。これ、田舎りの畫師と、もの貰ひと、

どれだけの相違がある。はツく。」

と笑うて、

「いや、こゝで煩いての。」と、一座をずらりと見る。

「兎角夏向きになりますと、得て然う云ふ蟲が湧くでえすな。」

「何も慰み、一つ此へ呼んで、冷かして遣りは如何でございませう。」

「龍虎梅竹、玉堂富貴、ナソレ牡丹に芍薬、薄に蘭、鯉の漉登りがと云ふと、鮒が素麺を食つて、柳に燕を、倒に懸けると、蘆に雁とひつくりかへる……ヨイくと云ふ奴でさ。些と御祕藏の呉道子でも拜ませて、往生をさせてお遣んなさ

います。」

「通せ。」と、叱るやうに云ふ。

やがて、紺緋に兵兒帯といふ、其の上、旅窶れのした見すばらしいのが、おづくと其へ出た。

態と慇懃に應接うて、先生、拜見とそり立てると、未

じゆく
熟ながら、御覽ごらん下さいましとて、絹地きぬぢの大幅たいふくを其それへ展ひらく。

せわずき
世話世話好好きなのが、二人ふたり立つて、此これを傍かたはらの壁かべへ懸かけると、燕つばめでも雁がん

でもなかつた。圖づする處ところは樓臺亭館ろうだいていくわん、重ちよう疊うでふとして緩ゆるく

る、御殿造りの極彩色ごくさいしき。——(頗すこぶる類せいやう西洋畫うぐわにるあす)と

あるのを注意ちういすべし、柱はしらも壁かべも、青あをく白しろく浮出うきだすばかり。

いちざあんぐわい
一座案外いざあんぐわい。

じよだいじん
徐大盡、例れいのフンと鼻はなで言いつて、頤あごで視ながめ、

「雜ざつと私わたしが住居すまひと思おもへば可いい。ぢやが、恁かう門もんが閉しまつて居をつて

は、一いつ向出入かうでひりも成なるまいが。第だい一いち私わたしが許ゆるさいではお主ぬしも此こ

處ゝへは通とほれぬと云いつた理合りあひぢや。我わが手てで描かきながら、出入でひりも

出でき來きぬとあつては、畫師ゑかきも不自由ふじゆうなものぢやが、なう。」

「御鑑定。」

「其處です。」と野幫間の口拍子。

畫師、徐に打微笑み、

「否、不束ではございますが、我が手で拵へましたもの、貴下

のお許しがありませんでも、開閉は自由でございます。」

「噫帖然一紙。」

と徐大盡、本音を吹いた唐辯で、

「塗以丹碧。公焉能置身其間乎。人を馬鹿に

すぢやの、御身は！」

畫生其の時、

「御免。」と衝と膝を進めて、畫の面にひたと向うて、熟と見る

や、眞畫の柳に風も無く、寂として眠れる如き、丹塗の門の傍なる、其の柳の下の潜り門、絹地を抜けて、するりと開くと、身を聳かして立つた、と思へば、畫師の身體はするりと入つて、潜り門はぴたりと閉つた。

あつと云つて一座、中には密と指の先で撫でて見て、其奴を視めたものさへあり。

「先生、先生。」

と、四五人口々に動揺み立つ。

「失禮、唯今。」と壁の中に、爽な少い聲して、潜り門がキイと開くと、蝶のやうに翩然と出て、ポンと巻、苧の灰を落す。しうぐわちうのさまをとふ。此は誰しも然うであらう。

衆問畫中之状。

此は誰しも然うであらう。

「一 所いっしょにおいてなさい、御案内ごあんない申まをしませうから。」

座ざにあるもの二言にごんと無いない。喜び勇よろこんで、煙管きせるを筒つにしまふやら、

前まへ垂だれを拂はたくやら。

「切符きつぷは何處どこで買かひますな、」と、畫ゑの門もんを見みて浮うかれるのがある。

畫師ゑし、畫ゑ一面ぐわめんの其その最さい大だいなる門もんを指ゆびして、

「誰方どなたも、此これから。」

いざと云いふ聲こゑに應おうじて、大門おほもん颯さつと左さ右うに開ひらく。で畫師ゑしが案あんな

内い。徐じよ大盡だいじん眞前まつさきに、ぞろはひと入いると、目めも眩くらむやうな一いち

面めんの櫛はしの緋葉もみぢ、火ひの燃もゆるが如ごとき中なかに、紺こん青じやうの水みづあつて、鴛をし

鴛どりがするくと白銀しろがねを流ながして浮うかぶ。揃そろつて浮足うきあしに成なつて、

瑪瑙めなうの八やツ橋はしを渡わたると、奥おくの方ほうに又また一堂いちだう。其處そこへ入はひると伽藍がらんの

たかてんじやう。素通りに進んで、前庭へ抜けると、再び其處に別

高天井。亭あり。噴水あり。突當りは、數寄を凝して瀧まで懸る。

瀧の巖に、石の段を刻んで上ると、一面の青田の見霽。

はるかに歩行いて又門あり。畫棟彫梁虹の如し。さて中へ

入ると、戸が一ツ。雲の扉に月が開く。室内に、其の大き釣

鐘の如き香爐が据つて、霞の如き香を吹いた。其の次の室も、

他は推して知るべしで、珍什奇器殆ど人界のものにあらず、

一同呆然として、口を利くものある事なし。

「最う此處までです、誰方もよくおいでなさいました。」と畫師

が言ふ。

其處に最一つ、美しい扉があつた。

徐大盡じよだいじんなん何としたか、やあ、と云ふ間に、扉とびらのなりに身をみをかはし
て、畫師ゑしが、すつと我手わがてで開あけて、

「さあ、御覽ごらん。」

「待まて、」と、徐大盡じよだいじんが手を開ひらいて留とめたも道理だうり、驚おどろいたも其
の筈はずで、今いまの美うつくしい扉とびらの模も樣やうは、己おのが美妻びさいの閨ねやなのであつた。
が、留とめても間まに合あはぬ。どやくと込入こみいる見物けんぶつ。

南無三寶なむさんぼう。

時ときもあらうに、眞夏まなつの日盛ひざかり、黒髪くろかみかたしく雪ゆきの腕かひな、徐大
盡じんが三度目さんどめの若わかき妻つま、絲いとをも懸かけず、晝寢ひるねをして居ゐた。(白絹はくけん
帳ちやう中ちゆう皓體かうたい畢呈ひつてい。)とある、これは、一息ひといきに棒讀ぼうよみの方ほう
に願ねがふ。

やつやつと颯さつと赤あかくな
 漸かへと颯さつと赤あかくな
 成なつて、扱しご帯ぎを捲まいて居ゐる處ところ。物もの狂くるはしく取とつて
 返かへせば、畫ゑ師しも其その畫ゑも何ど處こへやら。どぶろくも早はや傾かたむいて、殘のこ
 るは芋ず※ゐの酢す和あなりけり。

明治四十三年十二月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「畫《ゑ》の裡《うち》」とルビがついていません。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

畫の裡

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>